九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

寛永古活字版『源氏物語』一斑（二）：鶴見大学図書館蔵本をめぐって

田村，隆
九州産業大学国際文化学部：講師

https://doi.org/10.15017/25248

出版情報：語文研究. 110, pp.41-49, 2010-12-26. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

寛永古活字版『源氏物語』一斑（二）

――鶴見大学図書館蔵本をめぐって――

田村　隆

一

板本『源氏物語』の嚆矢は慶長初年に刊行された十行古活字版であると言われる。その後、伝嵯峨本が続き、元和寛永期に入ってから元和九年刊本、九州大学本、および二種の寛永版が刊行された。

二種の寛永版とは、川瀬一馬『増補古活字版之研究』[注1]によって、「元和九年刊本に拠つて寛永中に翻印せられた一本」と紹介されるものである。異植字版があり、氏は第一種・第二種と呼んでいる。その第二種について、筆者はかつて福山の広島県立歴史博物館黄葉夕陽文庫に所蔵される一本を調査した（『国書総目録』および『増補古活字版之研究』未記載）。黄葉夕陽文庫とは、神辺（かんなべ）の地に私塾黄葉夕陽村舎を構えた菅茶山の旧蔵書である。調査の結果は「黄葉夕陽文庫蔵『源氏物語』覚書」（『広島県立歴史博物館研究紀要』十、平成二十年三月）と「寛永古活字版『源氏物語』一斑――広島県立歴史博物館黄葉夕陽文庫本をめぐって――」（『語文研究』百五、平成二十年六月）の二篇に発表し、同じ寛永版第二種である大東急記念文庫本とは版面が異なる箇所を指摘した。その過程で、大東急本と黄葉夕陽文庫本のいずれにも九大本と同じ版が混入していることが確認された。九大本は寛永版に極めて近い版面を持つ。[注2]

今夏、新たに鶴見大学図書館が所蔵する寛永古活字版について調査の機会を得たので、上述の知見をふまえつつ、以下に報告する。

二

本書については鶴見大学の高田信敬氏によって、『藝林拾葉』（鶴見大学図書館新築記念貴重書図録、昭和六十一年）および『古典籍と古筆切』（鶴見大学蔵貴重書展解説図録、平成六年）において紹介されている。その中で、本書は寛永古活字版の第二種であることが、

先行する元和九年（一六二三）冨杜哥鑑印行の古活字版に基づく寛永の出版で、第二種所謂異植字版に相当。ノドの部分に「きりつ　一」の如く巻名と丁付を付印する。伝本稀れ、現存一〇部程度ではなかろうか。本文は元和古活字に同じく青表紙本系の三条西家本に近い。朱墨書き入れは特に最初の数冊に多く、湖月抄に依拠した注の転載がほとんど。後になると句読合点の類のみ。

（『古典籍と古筆切』）

の如く指摘される。私が本書の存在を知ったのもこの図録による。

図１　桐壺巻表紙

氏が「湖月抄に依拠した注の転載がほとんど」と指摘するように、本書には特に前半の巻々に『湖月抄』の書き入れが見られる。現存する伝本の多寡からすれば古活字版に『湖月抄』の書き入れとは今ではいささか奇妙にすら感じられるが、当時としては広く行われたらしく、黄葉夕陽文庫本にも『湖月抄』の書き入れが見られる。すでに指摘されるように、貞享元（一六八四）年刊行の井原西鶴『諸艶大鑑』には、

むつかしきは、太夫の身也。有時、物覚のよはき人、「わりなきは情の道」と書しは、柏木の巻にはなき」と

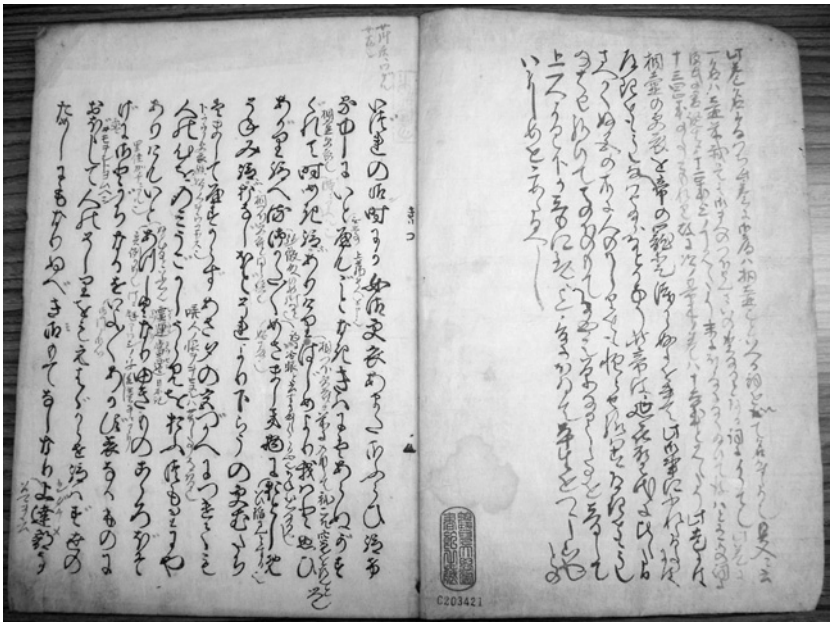

図２　桐壺巻冒頭

あらそひ、去太夫殿へ、源氏物語を借に遣しけるに、其まゝ湖月おくられて、即座に其埒もあけしに、此本を見て、「さてもく、此里の太夫もすゑになるかな。むかしは、名の有御筆の歌書を、揃へて持ぬはなし。板本つかはされて、物毎あさまになりぬ。……」(注3)

という記述があって、この頃には少なくとも「本」としての『湖月抄』は評価されていないようだが、時代が下ってからはその注釈が重宝されたのであろう。近時ではマイケル・エメリック氏の「後期江戸の戯作において、『湖月抄』は高級(注4)で学術的なイメージを与えられてきた」という指摘もある。『湖月抄』の存在感は、勝川春章（一七二六－一七九二）の「見立紫式部図」(注5)に描かれた『湖月抄』などからも窺い知れよう。

尚、鶴見大学本の夕顔巻・手習巻は古活字版ではなく、補写によるものである。これも高田氏により、「夕顔・手習の二冊を欠き、各々承応三年整版本（首尾欠、補写あり）と『湖月抄』によったかと思われる写本とで補う」（『藝林拾葉』）と指摘される。前稿で述べたように、寛永版第二種の夕顔巻は第二十七丁表に、

物のあし音ひしひしとふみならしつゝ、うしろよりくる心ちす。惟光とくまいらなんとおぼす。(注6)

と出てくる「惟光」が、「光惟」と転倒している版も存在する。大東急本は「惟光」と正しく配されているが、黄葉夕陽文庫本は「光惟」となっている。後述する久邇宮家旧蔵本も「光惟」である。興味深い事例だが、鶴見大学本は夕顔巻を欠くためこの箇所を確認できないのが惜しまれる。

三

九大本と同じ版は、九州大学所蔵本のほか、いまだ完本が報告されていない。ただし、混入という形で他の古活字版の中に痕跡をとどめる。大東急本にも黄葉夕陽文庫本にも九大本と同版の丁が混入していることは既に述べた。

また、混入というよりもむしろ取り合わせと称すべき本の存在も知られている。それは今西祐一郎『新出本による古活字版『源氏物語』本文の研究』（科学研究費補助金基盤研究（C）（2）研究成果報告書（研究課題番号13610507）、平成十六年三月）および、同「古活字版『源氏物語』拾遺」（永井和子編『源氏物語へ　源氏物語から――中古文学研究24の証言』笠間書院、平成十九年）によって紹介された久邇宮家旧蔵本で、全体の七割の丁が九大本と同版であることが報告されている。また、久邇宮家旧蔵本における残り三割の丁は寛永版第二種の版面であることも指摘された。一巻全体がいずれかの版であることもあれば、一巻の中に二つの版が混在している場合もあるという調査結果が示されている。すなわち、大東急本や黄葉夕陽文庫本とは構成比こそ大きく異なるものの、寛永版第二種と九大本の版面から成るという点では久邇宮家旧蔵本も共通しているのである。鶴見大学本もまた、九大本と何らかの接点があるのだろうか。

このような関心から鶴見大学本を他の寛永版第二種と比較したところ、わずかに二丁ながら、寛永版第二種とは異なる版面が含まれていることがわかった。一箇所目は夕霧巻の第二丁である。次頁の図3を参照されたい。

右の丁（一ウ）は寛永版第二種だが、左の丁（二オ）は九大本と同版である。写真だとわかりにくいが、実際に丁をめくってゆくとこの丁が他の丁と異なる版であることは一目で気づく。九大本と一致するこの丁のみ活字がくっきりと鮮明に刷り出されており、それに比べると他の丁（寛永版第二種）は若干かすれ気味の版面である。また、九大本の版の方が活字が大ぶりで、その分字間が狭いという印象も受ける。(注7)

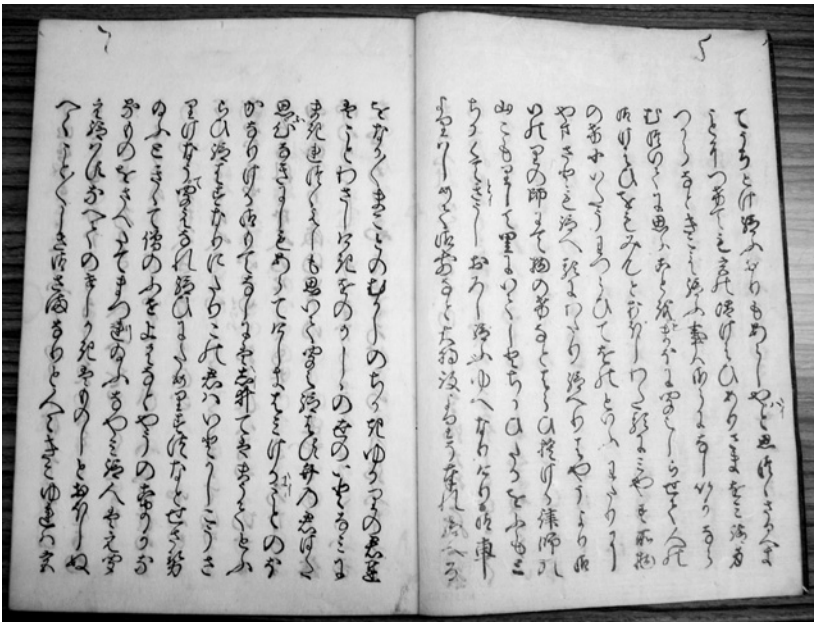

図３　鶴見大学本（左の丁のみ図５の九大本と同版）

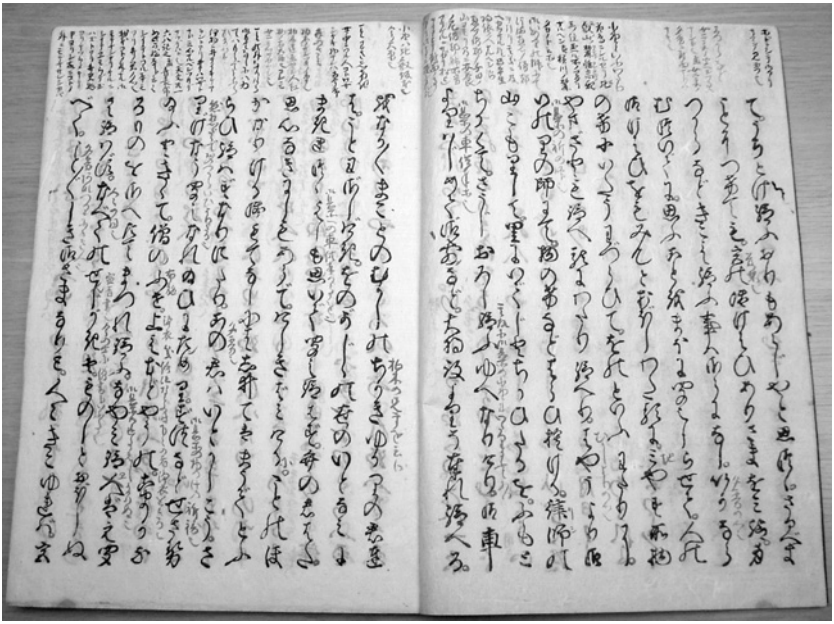

図４　黄葉夕陽文庫本（寛永版第二種）

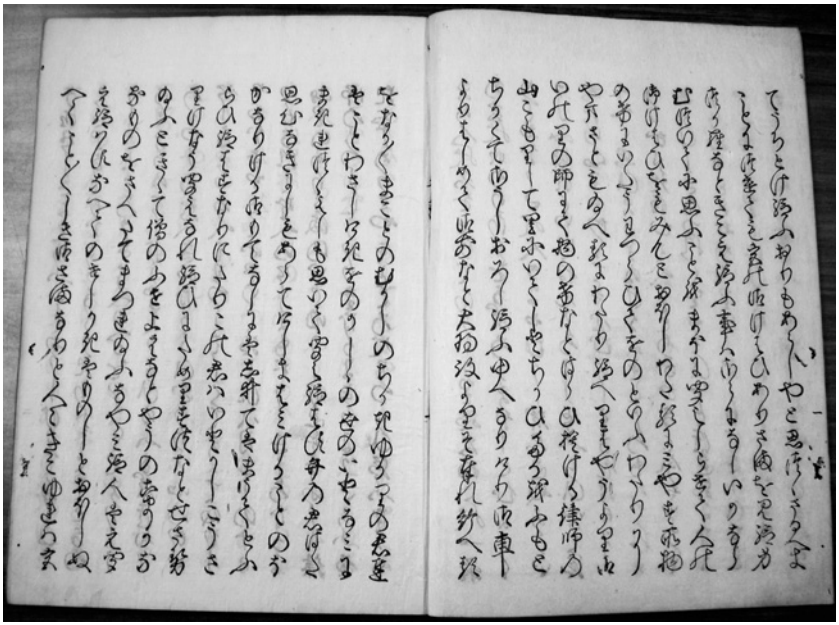

図５　九大本

もう一箇所は竹河巻の第十四丁である（図６）。

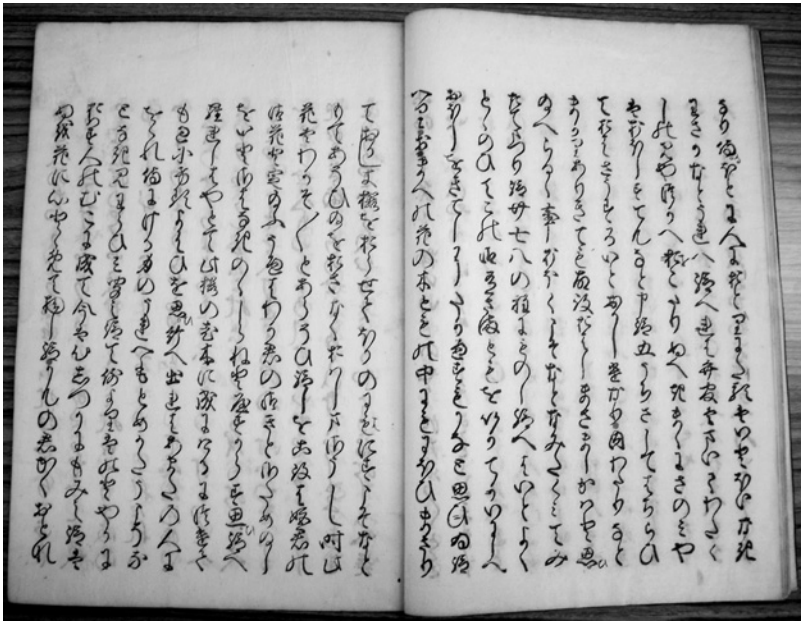

図６　鶴見大学本（左の丁のみ図８の九大本と同版）

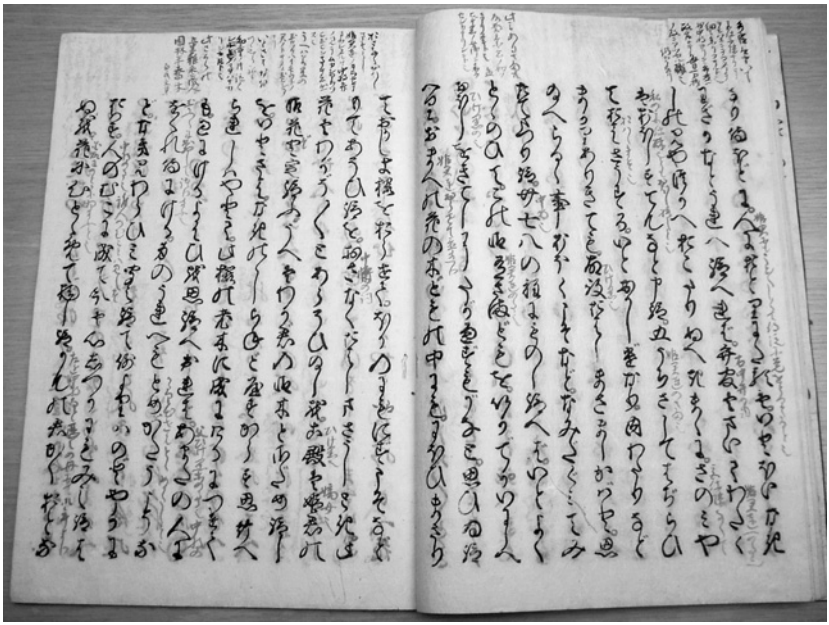

図７　黄葉夕陽文庫本（寛永版第二種）

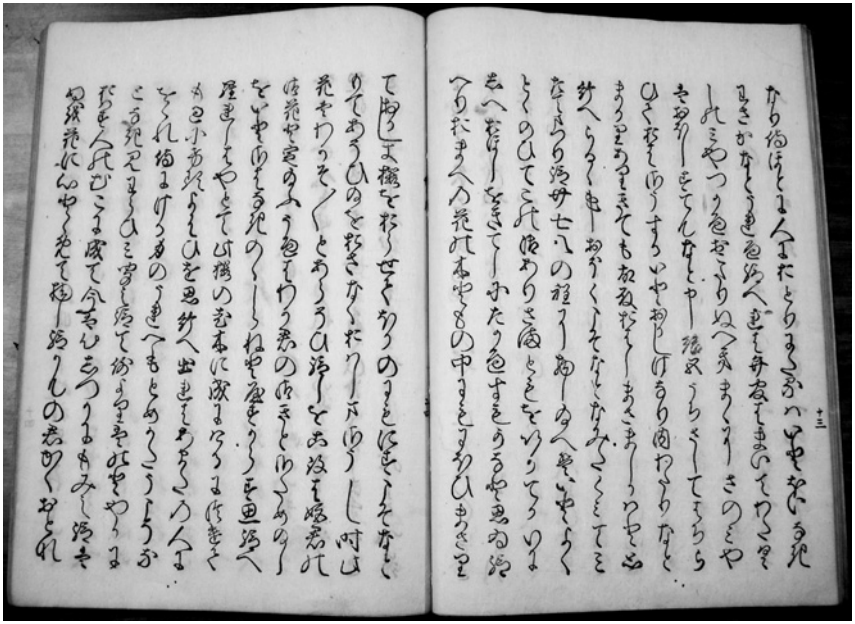

図８　九大本

夕霧巻の例と同様に、右の丁（十三ウ）は寛永版第二種だが、左の丁（十四オ）は九大本と同版である。

管見に入ったのは上述の二丁のみである。黄葉夕陽文庫本における九大本の版の混入は三丁で、大東急本における混入は百一丁であった。ただし、うち百丁は若菜上巻一冊の全丁である。私がこれまでに調査し得た寛永版第二種は黄葉夕陽文庫本と大東急本、そして今回の鶴見大学本の三本に過ぎないが、そのいずれもが製作に際して不足の丁を九大本の版で補っていることになる。やはり鶴見大学本も例外ではなかった。前稿で示した表に鶴見大学本を加えて再掲しよう。

巻名	第二種本	黄葉夕陽文庫本	大東急本	鶴見大学本
夕顔	第27丁表	「光惟」	「惟光」	（此巻欠）
若紫	第36丁	寛永版第二種	九大本と同版	寛永版第二種
若菜上	全丁	寛永版第二種	九大本と同版	寛永版第二種
澪標	第8丁	九大本と同版	寛永版第二種	寛永版第二種
東屋	第28・38丁	九大本と同版	寛永版第二種	寛永版第二種
夕霧	第2丁	寛永版第二種	寛永版第二種	九大本と同版
竹河	第14丁	寛永版第二種	寛永版第二種	九大本と同版

いまだ混入のない寛永版第二種が見られないこと、そして調査した三本ともが九大本の版を含むことは興味深い。寛永版第二種の不安定さとともに、九大本との密接な関係を改めて強く示唆する。久邇宮家旧蔵本が九大本の版と寛永版第二種から成ることもこの関係とおそらく無縁ではあるまい。そして、不安定さという点で言えば、寛永版第一種にも同じ事情はあてはまる。大東急記念文庫が所蔵する第一種本は若紫巻を欠くが、その欠は同じ寛永版の第二種によって補われている。(注8) 補填には決まって九大本の版が用いられる第二種本と、その第二種本によって補填する第一種本。欠巻の冊を補う場合と一冊の中のある丁を補う場合とでは事情も異なろうが、特に後者の場合は先行する本の刷り余りを用いたと考えるのが自然であろう。だとすれば、それは九大本→寛永版第二種という成立順序を意味するように思われる。ただし、そのときの補填になぜ第二種本に最も近いはずの第一種本ではなく、あえて九大本の版が用いられたのかという疑問は残る。そもそも、補填の時点で第一種本は成立していたのだろうか。そして、九州大学所蔵本の他には補填という形でしか姿を見せない九大本の版の役割は一体何だったのか。完本としてはどのくらい流布していたのだろうか。その果たした役割は、寛永版第一種本と第二種本の先後関係にも関わるように思われ

るが、それらの問題についてはさらに伝本の調査を続けながら考えたい。

注

注1　The Antiquarian Booksellers Association of Japan、昭和四十二年。

注2　九大本は九州大学附属図書館研究開発室作成の「日本古典籍画像データベース」(http://mars.lib.kyushu-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000002rare2) に公開されている。

注3　新日本古典文学大系による。

注4　「『修紫田舎源氏』をどう読むか――『源氏物語』を越えて――」(講座源氏物語研究第五巻『江戸時代の源氏物語』おうふう、平成十九年)。氏は、『修紫田舎源氏』の「全部引書目録」に『湖月抄』が挙げられていない理由を考察する中で、『湖月抄』の「高級で学術的なイメージ」を指摘する。その例として、南杣笑楚満人作、歌川豊広画『敵討時雨友』(享和二年刊) などを挙げている。

注5　『石山寺の美――観音・紫式部・源氏物語――』(大本山石山寺、平成二十年) などの展示図録に図版が載る。

注6　大東急本により、句読点等を私に施した。大東急本の調査・引用には、今西祐一郎先生よりお預かりしたマイクロフィルム紙焼きを使用した。

注7　前述『新出本による古活字版『源氏物語』本文の研究』において、寛永版に比べ、「九大本の活字の方が太細の対比が明瞭で文字に勢いが感じられるとともに、輪郭鮮明」であり、「寛永版は、全体に字体が萎縮した印象とともに版面全体に「鈍さ」のようなものが看取されるであろう」との指摘がなされている。

注8　川瀬一馬『古写古版 物語文学書概説』(雄松堂書店、昭和四十九年) に、「本書には「若紫」巻一冊 (栗皮色原表紙附) のみ別種異植字の古活字版で補つてある」と指摘される。

(付記) 鶴見大学本の閲覧に際して高配を得た鶴見大学図書館の吉田千登世氏に深謝申し上げる。尚、本稿は平成二十二年度文部科学省科学研究費補助金若手研究B (研究課題番号２０７２００５６) による研究成果の一部である。

(たむら　たかし・九州産業大学国際文化学部講師)